

ススキコージの『このひらほる村』(理論社・九八〇円、一九八七・八)は、ひさしづり

は一九四八年生れで、つまり私は一九四八年生れで、つまり私よりひとまわり下の鼠なのにな

出版社の女性編集者が、遊びだか仕事の依頼だかわかんないように来たので、この本の話をしたら、ああ、コージくんねと

「鉄棒は近よって見るだけでゾーンとして、先生に尻などを

まっ、まるで先生は米タワラをかっいで鉄棒と戦っているよ

「なんだか他人事でないような話だが、疲れた順番がまず自分

「畏れおれも、稚拙な、そして、すべれた教養に満ちあふれた、自己流の文章」(あとがき)

小学校時代までの自分史

ススキコージ『このひらほる村』

資質で定義すると深沢七郎は児童文学作家

「現在の自分とは、クモの糸のように0歳からずーっと、一本につながって

「私たちがどうも思っていたのは山々、でもたぶん錯覚や見栄

「お整さんの話を聴くのが好き

「なるほど、毎日の黒いコンチの

「でも、幹太のおばあさんの

児童文学

最首 悟

リアリスト

「断絶を固定化する」とーター

「その時代をひきずって、とい

「おはかしいかに依拠して、

「J・ロックではないが、子ど



山中 恒氏

「あたしは子供の頃から近処

「その絵を破いてしまつ。父親も

「前作の『ボーイフレンド』

「手・生物学専攻」